

心教を以って尚と為す——江戸に学ぶ「人間教育」の知恵

敬文舎

写真所蔵先(写真協力者)

- ・別府明雄氏 p162
- ・大空社出版 p146
- ・国立国会図書館 p157
- ・玉川大学図書館 p175
- ・宿南ふれあい倶楽部 p197

装丁・デザイン
 図版
 編集協力

竹歳 明弘
 蓬生 雄司
 阿部いづみ

はじめに 10

第一章 早く、正しく育てよ——先入主と年代別教育論
 育てたように子は育つ 14

13

江戸時代の「教育」は家庭教育
 ジガバチのたとえ
 子供の善悪は親次第
 育てたように子は育つ

藩主が綴った人生七〇年の計 25

江戸時代に一般化した「五計」
 九九と商人の生き方を同時に教えた『九々往来』
 殿様が領民に説いた人生七〇年の計

胎教からはじまる人間教育(一) 37

胎内記憶・誕生記憶に関する証言の数々
 二二〇〇年前から存在した胎教
 日本最古の医書『医心方』も胎教を詳述

胎教から始まる人間教育(二) 44

江戸前期の胎教論——中国胎教論からの脱皮
 江戸中・後期の胎教論——多彩な論者と庶民への普及
 「六論衍義」から展開した日本の育児思想 55
 官民一体で流布した道徳教科書



『大意』が教えた幼児教育
『小意』が強調した幼児教育の要
小町玉川の子育て七か条 63

『自修編』が説く幼児教育の重要性
『てみやげ』の子育て七か条
利口は危うし 73

才走る子の行く末
利口は手に負えない
五、六歳の才走りは駿馬のごとし
親も育てた「預かり子教育」 81

君子は我が子を教えない
地域社会での子育て
子供遊びの育児心得 92

命は天にあれども、寿は天にあらさず
成長とともにすたれる遊びは無害

第二章 学んで親となれ——父母の育児心得と実践

山鹿素行の父道と教育論（一） 102

父親の一生は子育ての連続
『山鹿語類』の父道論

山鹿素行の父道と教育論（二） 110

素行のもうひとつの教育論『武教小学』
武家男女の教育を説いた「子孫教戒」

母の育児促す母道教育論 117

母道教育論の萌芽
育児における父母の心得
『父子訓』の説く母道

勘当をめぐる江戸の子育て（一） 128

江戸後期の「勘当」ブーム
未熟な親の、子育て知らず
勘当は子育ての失敗

勘当をめぐる江戸の子育て（二） 135

勘当は親の油断からはじまる
人を育てる「あやまり役」

子育てを教えた二つの往来物 144

子供よりも親に訴えた『浜庇小児教種』
子供に子育ての基本を教えた『養育往来』

我が子に向き合う父と母 155

父が徹夜で綴った参考書
母が授けた座右の書



奉公と親心 (一) 163

いたいけな樽拾い
江戸になだれ込む奉公人たち
近場の奉公も、親には不憫

奉公と親心 (二) 172

親心を伝える名作「蔽入り」
遺書同然の手紙

第二章 人を育てる極意——厳格教育と徳教

命限りの後継者育成 (一) 182

勉強嫌いの少年が日本有数の農業指導者に
一人前になるまで最低一〇年の庄屋教育
六万九〇〇〇字に及ぶ実践哲学

命限りの後継者育成 (二) 191

『親子茶吞咄』に学ぶ、人づくりの秘訣
親心で奉公人を育てよ
後継者を吟味し、隠居後も引き立てよ

体罰なき教育こそ日本の伝統 (一) 199

体罰教育のブームは近代以後
「師匠が弟子を打つ」意味
育児書にみられる体罰容認論

体罰なき教育こそ日本の伝統 (二) 208

外国人が絶賛した日本の育児
江戸時代の体罰の状況
体罰否定論の根拠
弱者への暴力は臆病者の所業

厳格教育の本質 (一) 221

厳格教育の主張は溺愛の警告
益軒の厳格教育
徳教は人間教育の理想
厳格教育に欠かせない心服

厳格教育の本質 (二) 230

自反のための学問
指導者の度量に人は従う
一斎に学ぶ指導者の心構え

徳教と心の教育 (一) 251

指導者は徳教＝心教を追求せよ
『言志四録』に学ぶ、叱り方の秘訣
武將に学ぶ子供の叱り方
かつて小学生の常識だった「近江聖人」
幾星霜を超えた藤樹の余徳
徳教の人、中江藤樹



徳教と心の教育 (二) 260

出版トラブルが契機で世に出た『鑑草』
子育ては親子が真の幸福を得る道
幼児教育と成人教育のちがいがい

第四章 修己治人のくふう——しつけと志の教育

「人様」を教えた『親父の小言』 270

大聖寺本「親父の小言」四五か条
江戸版『親父の小こと』八一か条
『親父の小言』を貫く「人様」の精神

一生の策は若きときにあり 280

異色の道徳教科書『在郷童教訓書』
さまざまな場面での心遣い
病苦をやらわらげる大人の気遣い

しつけと挨拶教育の伝統 (一) 290

外国人が驚嘆、日本人の礼儀正しさと
しつけ重視の人間教育
しつけ教育の指針となった『前訓』

しつけと挨拶教育の伝統 (二) 299

武家故実の名門、大館家
挨拶教育の徹底を促した「礼学童蒙必用」
挨拶は「我」を除くしつけ

しつけと挨拶教育の伝統 (三) 308

『貞丈雑記』における礼法と挨拶
「三辞三讓」の伝統
礼の本質は「克己」と「忍耐」
内面から滲み出る「盛徳の威儀」

為政者の資格 319

武||「止戈」を忘れるな
平和な社会と民生の安定が武士の面目
ならぬことはならぬ 326

子供が子供を育てた「仕」
会津精神涵養の要、『日新館童子訓』
『日新館童子訓』の教え

立志の教育 (一) 333

志は人生の舵
森信三、一二歳の衝撃
『修身教授録』に学ぶ立志

立志の教育 (二) 341

江戸の立志論——『言志四録』を中心に
百折不撓の人、塙保己一

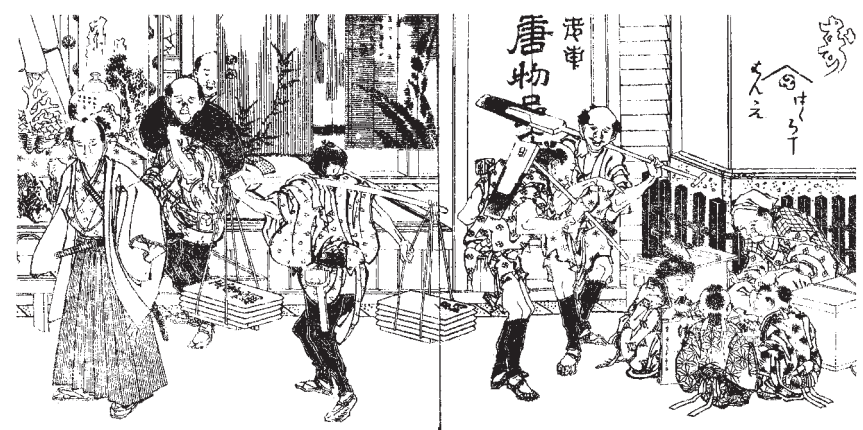
おわりに 354

主要参考文献 358

索引 365

【凡例】

- 一、引用部はなるべく原文通りとしたが、漢字表記は原則新漢字に統一し、踊りなどの繰り返し符号は該当する語句に改め、漢文調の語句は適宜書き下し文に改めた。また、引用部のルビは全て現代仮名遣いで統一した。
- 一、出典で示した頁は、引用部の冒頭箇所を示す（複数頁にまたがる場合も冒頭のみを示した）。
- 一、本書に掲げた図版は、一部の例外（前掲「写真所蔵先（写真協力者）」を除いて、すべて著者所蔵史料または著者撮影による。



はじめに

令和二年五月一六日現在、日本での感染者一万六二五三人、死亡者七二九人。全世界の感染者約四五四万人、死者約三二万人。新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）が、今、人類を脅かしている。いつ終息するのか、先行きが見えないどころか、燎原の火のように全世界に感染拡大をつけている。「令和」改元、消費税率一〇パーセント導入を経て、東京オリンピックを目前にした昨年暮れに、だれがこのような事態を予想したであろうか。

いや、いたのである。占いの師のオフエリア・麗さんは、「二〇二〇年の前半は、はっきり言って日本にとって試練のときとなりそうです。前半の早い時期に大きな出来事があり、激動の時代が始まります」と予見し、令和二年は「日本社会の悪い面が噴出し、価値観が変わる」年になるというメッセージを昨年一二月二六日に発信してゐた（「telling」ホームページ）。

その予想は見事に的中し、日本を含む全世界の社会が根底から変わらざるを得ない事態に陥り、全世界の人びとが新しい生き方を迫られている。

この「戦後最大の国難」を乗り越え、以前の生活に戻したいと思っても、おそらく困難だろう。生活を取り戻すことよりも、生き方を見直すことが大切だ。極言すれば、死ぬときに後悔しない生き方を沈黙考すれば、立ち帰るべき原点も明らかになるだろう。取り戻すべきは、人間本来の尊い心（明德・仏性）である（二六〇頁）。

このような難局や人生の岐路に立ったときに大きな指針となるのが、先人の教えである。迷いや不安が生じたら、たとえば、貝原益軒や佐藤一斎に教を請うがよい。

危機的状況での対処について、益軒は、「不意の禍に遭遇して、どうして良いか分からなくても、心を苦しめて、楽しみを失ってはならない。静かに思案すれば、その禍を逃れる工夫も出てくることもある。行き詰まって、苛立つてはいけない。心を広くして十分に深く考えるがよい」（『大和俗訓』四巻）と述べているし、一斎も、「きわめて困難なことに遭遇したら、焦って解決しようとしてはならない。しばらくそのままにし、一晚、枕元でその半分位を考えながら寝て、翌朝、すっきりした気持ちでその続きを考えれば、必ず、一条の解決の糸口が見えてくる。…それから、難問を一つひとつ処理していけば、たいていは間違いを起さない」（『言志後録』四五条）と教えている。

さらに、一斎は、「政治が、一事の是非を見て、全体の是非を問わないとき、そして、一時の利害にこだわらず、永久の利害を考えないとき、まさに国は危険な状況にある」（『言志録』一八〇条）と、平成時代の政治・経済を象徴する「三だけ主義（今だけ、金だけ、自分だけ）」を見透かした一言も残している。今後「コロナ大恐慌」が一〇年以上つづくともいわれる。しかし、大所高所から事態を見きわめると、コロナ危機も悪いことばかりではない。益軒は、『大和俗訓』で逆境の意義をこう指摘する。

順境に処するのはたやすく、逆境に処することはむずかしい。逆境のときは、畏敬の念が起こり、身の過ちが少なく、かえって福となる。逆に、順境のときは、驕慢や怠慢の心が生じて身の過ちが多く、身の禍となる。…憂いと畏れがあれば、生命を保つ。安楽で放逸なら、死をまぬがれがたい。敵のある国が長くつづき、敵のない国がかえって亡びやすいようなものだ。



このように、益軒や一斎の言葉を改めて読み直すと、いつの時代にも通用する「不易^{ふえき}」の言葉に出会うことができる。これら先人の知恵を「精神論」として軽視する風潮もあるが、私はそうは思わない。現代人が「精神」や「心」を取り戻せば、もっと高い次元に行けるものと信じている。

本書は、公益財団法人日本武道館発行の月刊誌『武道』に三年間（平成二五年一月号～二七年二月号）連載した「江戸『人間教育』の知恵」全三六回の原稿に大幅な補訂を加えたものである。本書主題の「心を以て尚と為す」は、江戸時代の人間教育の奥義を象徴する言葉で、佐藤一斎の『言志^{げんし}耄^{まう}録^{ろく}』から採った（二四一頁）。副題の「江戸に学ぶ人間教育の知恵」は、連載記事のタイトルを活かした。

ただし本書では、連載順によらず、各回の主要テーマにより、四つの章に分けて配列した。また、資料性を高めるために、連載記事に未掲載の史料も多く引用し、典拠もすべて明記し、多くの図版を補充したほか、利便性を図る索引も付けていただいた。

なお、本書で取り上げた江戸時代の文献はほとんどが家蔵本で、江戸の教育論はほかにも数多くあるが、私が読者にお伝えしたい要所は本書にほぼ網羅されている。

本書が、家庭・学校・地域・企業など教育にかかわる皆様に多少の参考となり、あるいは江戸研究の契機となれば、望外の喜びである。

振り返ると、本書の刊行には、つぎのような紆余曲折うよまげがあった。

昨年度まで法政大学文学部の非常勤講師をしてきた私には、ここ数年、同学部教員のX氏より、新年度の授業担当についての打診メールが来るようになった。令和元年九月二日付けメールには、大学のカリキュラム改革の關係で「来年度は通信教育部でお願いしたい」とあった。新規科目は「日本史特講（日本教育史）」で、テキストを指定して受講生にレポートの課題を出し、そのレポートを添削指導てんさくしゆくするもので、テキストは拙著から選ばばよいとのことだった。

そこで改めて調べると、講義に使えるような拙著はどれも絶版になっていた。それを付記して基本的に快諾する旨を伝えた。

その返信（九月一八日）に、「絶版ではむずかしいので、新たにテキストを執筆するか、別の（著者の）市販本を使ってほしい」とあった。そして「（その時点から）約一か月以内に完全原稿を提出すれば翌年三月までに出版できるが、あるいは初年度は市販本とし、再来年からの教科書を改めて準備してはどうか」と提案してきた。以下は、引きつづき一〇月一日にX氏とやりとりしたメールの要旨である。

X「今月の会議で審議予定のため、教科書はなんとかなりますか」↓「三月末刊行に向けて原稿執筆をはじめています」

X「そうであれば、現状の書誌情報をお知らせ下さい」↓「現状ではほとんど決まっていますが、二点のうち一点は下記の通りです。もう一点は原稿がまとまってからの交渉になりますので、一二月下旬までお待ち下さい」

X「現状でほとんど決まっていないものを教科書とすることに、はなはだ不安を覚えます。これでは会議にかけられません。他者の執筆でもよいですから教科書になりそうなものはありませんか？」

そこで、教科書としては不満のある拙著の一冊と市販本の一冊を提案のうえ、「初年度は月刊『武道』の連載記事の元原稿（PDF版）で代用できないか」と尋ねた。

その返信（一〇月八日）には、「拙著以外の市販本を教科書にするしかないこと」に加えて、新たに「教科書は三〜四年変更不可」「兼任講師は六五歳まで」という条件が加わった（つまり、新刊予定の拙著はほぼ使用不可となる）。言うまでもなく、PDF版は拒絶された。

しかし、すでに敬文舎での出版について具体的な話が進んでおり、いざ出版の暁に「教科書として使えなくなりました」では済まされたいし、このようなやりとりに、これ以上、時間を浪費したくないため、一〇月一〇日に「諸般の事情から、私にはその資格や条件が整っていませんので、今回のお話は辞退させていただきます」とX氏に返信した。こうして、約一か月のX氏とのやりとりで、一四年務めた法政大学を去ることとなった。

あとは、別の非常勤講師を務める授業の教科書に指定するか、私が主宰する「江戸薬舎」や、広島県三次市立図書館主催のネット講座「おとなの寺子屋」などで活用するしかないという思いで、敬文舎の柳町社長に相談し、本書の原稿作成を急いだのであった。

明けて今年の一月下旬に、突然、立正大学社会福祉学部の非常勤講師のお話があり、お引き受けした。そこで、下半期の授業では、本書をテキストにした講義計画を立てた。以後、担当授業のシラバス作成な



ど、めまぐるしい日々がつづき、ホッとする間もなく、新型コロナウイルスの影響で上半期の授業がすべてオンラインとなった。同時に、その他の各種講座はすべて中止または延期となった。

いずれにしても、最終的には、ひそかに念願してきた「江戸の人間教育」の講義の機会をいただくことができた。「禍福はあざなえる縄の如し」の俚諺のように、長い目で見たら、何が幸いするかはわからない。「親父の小こと」が最後を「悪き事もよしよしといわい直せ」と結ぶ（二七七頁）のも、その謂いであろう。

さて、私が江戸時代の育児書の研究をはじめようになった経緯に触れておこう。

まず、二八歳になったばかりの昭和六二年の春、神田神保町のある古書店で一冊の『庭訓往来』を見たことが、江戸時代の研究の契機であった。ちょうどそのころ、ある本（今となっては書名が思い出せないが）のなかで、「好きな事を毎日三〇分、一〇年つづけられれば、その道のエキスパートになれる」と書いてあったので、それをひたすら実践したところ、一一年後に最初の著作を出版することができ、その翌年、金沢大学より学術博士を授与された。

その間、往来物の研究をはじめた間もない平成元年に、平凡社東洋文庫の『子育ての書』を読んだことがきっかけで、江戸時代の育児書に興味をもった私は、往来物と並行して江戸く明治初年の和装本の育児書を蒐集するようになったが、その過程で、いわゆる通俗教訓書の多くに、育児についての記述があること、また、往来物でもしばしば育児に言及した箇所があることを知った。以来、育児に関する記述のあるものを探求しつづけ、その多くを『近世育児書集成』全一八巻として公刊した。

ちなみに、本集成所収の育児書一〇四点のうち著者が明らかかな九一人の職分は、①漢学者二二・〇%、②医者九・三%、③書家・手習師匠七・二%、④往来物作者六・六%、⑤心学者六・〇%、⑥僧侶四・九%、⑦幕臣（郡代・代官）四・九%、⑧経世家三・八%の順で、ほかにもさまざまな職分の者が育児書を著していた（これは江戸中期以降の育児書の急増と無縁ではない）。とにかく、近世の育児書や育児論は、探せば無数に見つかると思われ、まだまだ検討の余地がある。

したがって、拙著は、江戸時代の育児書研究の一里塚、いや、小さな一歩にすぎないかもしれない。ぜひとも、後進の皆さんに江戸の子育てや日本の教育文化の研究を深めていただくことを切望して擲筆する。

最後に、本書出版まで種々のご教示を賜り、私の要望にも最大限応じてくださった株式会社敬文舎の柳町敬直様はじめスタッフの皆様には深謝申し上げます。

令和二庚子年五月中旬、身は蟄居しつつも、心は薫風の如く

小泉吉永